

鈴木貫太郎のリーダーシップについて

黒沢文貴(東京女子大学名誉教授)

はじめに

年譜

- 慶応3年(1868年) 関宿藩久世広周の和泉国の飛び領地(現・大阪府)にて代官の子として生まれる
- 明治10年(1877年) 父・由哲の群馬県庁への就職に伴い前橋市に転居
- 明治11年(1878年) 第一番小学校厩橋学校(現・前橋市立桃井小学校)卒
- 明治16年(1883年) 旧制前橋中学(現・群馬県立前橋高等学校)を経て、海軍兵学校受験準備のため、芝新銭座の近藤塾(攻玉社の前身)に進む
- 明治17年(1884年) 海軍兵学校入校
- 明治20年(1887年)7月25日 海軍兵学校卒(14期)
- 明治22年(1889年) 任海軍少尉
- 明治25年(1892年)12月21日 任海軍大尉
- 明治27年(1894年) 7月 対馬水雷隊艇長、その後日清戦争に従軍
- 明治30年(1897年) 海軍大学校将校科学生、同年大沼とよと結婚
- 明治31年(1898年)
 - 4月29日 海軍大学校甲種学生
 - 6月28日 任海軍少佐
 - 12月19日 海軍大学校甲種学生卒(1期)。海軍軍令部第一局局員兼海軍省軍務局軍事課課僚
- 明治32年(1899年) 海軍省軍務局軍事課課僚、兼陸軍大学校兵学教官兼海軍大学校教官兼学習院教授
- 明治34年(1901年)7月29日 ドイツ駐在(～明治36年(1903年)12月30日)
- 明治36年(1903年)9月26日 任海軍中佐
- 明治37年(1904年) 日露戦争に駆逐隊司令として従軍(～明治38年(1905年))
- 明治40年(1907年)9月28日 任海軍大佐
- 明治43年(1910年)7月25日 海軍水雷学校長
- 大正2年(1913年)
 - 5月24日 任海軍少将
 - 8月10日 第二艦隊司令官
 - 12月1日 海軍省人事局長。

- 大正 3 年(1914 年)4 月 17 日 海軍次官
- 大正 4 年(1915 年)6 月 足立たかと再婚
- 大正 6 年(1917 年)
 - 6 月 1 日 任海軍中将
 - 9 月 1 日 練習艦隊司令官
- 大正 7 年(1918 年) 遠洋練習航海
- 大正 7 年(1918 年)12 月 1 日 海軍兵学校長
- 大正 9 年(1920 年)12 月 1 日 第二艦隊司令長官
- 大正 10 年(1921 年)12 月 1 日 第三艦隊司令長官
- 大正 11 年(1922 年)7 月 27 日 呉鎮守府司令長官、長官に異動前に皇太子の北海道行啓に随伴
- 大正 12 年(1923 年)8 月 3 日 任海軍大将。
- 大正 13 年(1924 年)1 月 27 日 第一艦隊司令長官兼連合艦隊司令長官
- 大正 14 年(1925 年)4 月 15 日 海軍軍令部長
- 昭和 4 年(1929 年)
 - 1 月 22 日 予備役編入、侍従長に就任
 - 2 月 14 日に枢密顧問官を兼任
- 昭和 11 年(1936 年)2 月 26 日 二・二六事件で襲撃され、頭と心臓、及び肩と股に拳銃弾を浴び瀕死の重傷を負うも奇跡的に回復、九死に一生を得る
- 昭和 15 年(1940 年)6 月 24 日 枢密院副議長を経て、19 年(1944 年)に枢密院議長に就任
- 昭和 20 年(1945 年)
 - 4 月 7 日 組閣の大命を受け、内閣総理大臣となり終戦工作に奔走する
 - 4 月 12 日にアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトが死去。海外向けに哀悼の談話を発表
 - 7 月 28 日にポツダム宣言について記者会見し「共同声明はカイロ會談の焼直しと思ふ、政府としては重大な価値あるものとは認めず黙殺し、斷固戦争完遂に邁進する」^[11]と回答。日本の同盟通信社で「ignore(無視)」、ロイター、AP 通信で「reject(拒否)」と訳され配信された
 - 8 月 14 日にポツダム宣言受諾を御前會議で決定
 - 8 月 15 日、玉音放送のあと内閣総辞職(東久邇宮内閣成立の同月 17 日まで職務執行)。早朝、佐々木武雄陸軍大尉率いる国粋主義者達の襲撃を受ける。夫妻は警護官の手により小石川の私邸から脱出し難を逃れる。直後、私邸は佐々木達により焼き払われる
 - 12 月 15 日に平沼騏一郎枢密院議長が戦争犯罪容疑で逮捕されたために、再度枢密院議長となる

- 昭和 21 年(1946 年)6 月 3 日 公職追放令の対象となったため、清水澄副議長に枢密院議長を譲って辞職
- 昭和 23 年(1948 年)4 月 17 日 82 歳で死去。関宿町(現:野田市)の実相寺(関宿藩藩主の久世家の国元における菩提寺)に葬られた(遺灰の中に二・二六事件の時に受けた弾丸が混ざっていた)

一、 非藩閥系としての出自

二、 純武人タイプの海軍軍人として

三、 海軍の中枢に

四、 連合艦隊司令長官から海軍軍令部長へ

おわりに —鈴木貫太郎の人とリーダーシップ—